

氏名	赤 松 力
授与した学位	博 士
専攻分野の名称	学 術
学位授与番号	博甲第1456号
学位授与の日付	平成8年 3月25日
学位授与の要件	文化科学研究科産業社会文化学専攻 (学位規則第4条第1項該当)
学位論文題目	近代都市・農村社会事業の研究 ——岡山県地域を中心に——
論文審査委員	教授 坂本 忠次 教授 藤本 喬雄 教授 下野 克巳 教授 松永 昌三

学 位 論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、わが国明治中後期及び大正期における資本主義的貧困の発生過程において展開された社会事業の推移について、岡山県下の地方都市及び農村部での事例を具体的に検証し、大正期の社会事業の組織化の方向について展望した論文である。その主要事例として、石井十次と岡山孤児院、藤井静一の馬屋上村における農村社会事業、岡山の済世顧問制度の延長上に位置する岡山県社会事業協会などが検討対象とされている。

本論文は、序章と終章及び5章から成っている。序章は、論文の背景と研究への視角であるが、明治・大正期社会事業成立の背景と視角、研究史にみる論点及び本論文の構成と意義について述べている。まず、都市社会事業としては、1887年(明治20)石井十次によって創設された岡山孤児院を課題とし、「石井十次の救済思想と孤児院事業の展開」を上・中・下の3章に分けて叙述し、その思想と事業の特質を解明している。

第1章では、その副題のとおり「石井十次の思想遍歴と救済観」について検討している。武家の子弟として高鍋藩(現宮崎県高鍋町)に生まれた彼の人間形成は、当初漢学と儒教思想によったが、維新後のわが国のヨーロッパ諸国との交流によって、必然的に西洋文明・外来思想としてのキリスト教との接触・受容となっていく。儒教思想保持者の十次に文明開化の警鐘を鳴らしたのは、西洋医萩原百々平(どどへい)であった。十次が儒教思想からキリスト教思想へと変遷したのは、この時からである。以後、十次のキリスト教観は、たえず苦悩と変遷をたどるが、医学校時代とその後について『岡山孤児院新報』など新しい史料で検証した。そうして、彼のキリスト教観が孤児教育や孤児院経営に、そして彼の他界後の孤児院存廃問題にどう影響したかを解明した。

第2章では、岡山孤児院の経営問題を論じた。「経営」とは、主に財政問題であるが、孤児院の収入は、会員制による拠出金から出発し、労働自助、さらに孤児の実業部による労働自活へと推移し、その食は、己の働きによって得る主義を採用した。しかし、孤児達は、多くの点で心身ともにハンディキャップを持っていた。十次は岡山孤児院音楽幻灯隊を編成し、賛助員一万人の募集運動を展開したが、これは、孤児達のハンディキャップを克服するための一手段であった。本章では、こうした視点から、孤児院における基本金募集を含めた極端な寄附金募集の意味とその影響および基本金のキリスト教教理上の問題点などを、十次の林源十郎宛書簡などを通じて究明している。日清戦争後の経済不況のもと経営危機が訪れるが、十次は、この危機を乗り切るため、彼の持って生まれた企業性、企業感覚によって孤児の商業活動を奨励した。また、十次自身も郷里高鍋の産業振興に尽力している。ここには、キリスト教における「天の理」と「地の理」との相剋が見られ、孤児院の経営では、「地の理」の実践が優先していったこと、こうした企業活動が以後の孤児院経営に与えた影響などを検証している。また、十次の企業活動は、明治20年代からの孤児院発展期と40年代における整理期とでは力点の置き方が異なることを実証した。

第3章では、大正期の岡山孤児院存廃問題について論じている。日本の岡山孤児院にまで名声を高めた同院を、十次の死後何故廃止しなければならなかったのか。まずその理由について、原泰一らの見解を検討している。次いで存廃問題に対する賛成反対の両論について紹介し、分析した。留岡幸助や岡山孤児院評議員の一人元第三高等学校長折田彦市な

ど教育者の廃止論の主張と併せ、岡山孤児院出身者自身の孤児院や育児院の名称を廃止すべきとの現実的な提案に光を当てている。特に、廃止論者で、十次の孤児院事業の有力な支援者であった倉敷の産業資本家・大地主の大原孫三郎の孤児院事業失敗論の主張と、大原の孤児院の継承事業（大阪の石井記念愛染園、救済事業研究所の併設ほか）の構想とその意義について述べ、その主張の特質を解明している。これらの施設は後の大原社会問題研究所に発展したのである。

次に、農村社会事業として第4章で明治後期から大正期にかけて展開された岡山県馬屋上村の藤井静一の農村社会事業を事例として検証した。藤井静一の農村社会事業は、明治30年代と40年代及び大正期の事業で性格上の変化が見られる。当初の小作人備荒貯蓄事業、私有山林解放事業、安部倉懺悔会・融通講などの農村社会事業は、その根底に小作農民への永安家精神の涵養と自作農復帰への奨励的事業としての意義があった。しかし、明治40年代の政府の地方改良政策のもとで思想的にも制度的にもその制約のもとに置かれ、また、静一自身の村内地主・名望家的地位がもたらす限界も見られ出している。しかし、彼の救済思想の根底には、日蓮宗不受不施派の信仰の影響もあり、それ自身の独自性もあった。こうした彼の事業は、大正期に入り、彼自身もその委員の一員に選出される岡山県済世顧問制度に呼応して、総合的・有機的な農村社会事業として集大成されるに至っており、その移行過程を検証している。

第5章は、大正期における救済制度の組織化とその課題について論じている。ここで言う組織化とは、論者によれば、公私による救済事業の協同化の手法を意味しているが、その具体化は、まず、全国に先駆けて創設された岡山県済世顧問制度であった。しかし、この制度は、米騒動によって内在的に抱えていた問題点が露呈した。そこで、大阪府で開始された方面委員制度との比較を行い、両者の相違点を解明した。そして、その内在的問題点の是正対応への第一着手として、論者は、岡山県社会事業協会の設立をあげている。同協会は、その施設事業として、中央職業紹介所（1920年）、共同宿泊所・授産場（1921年）、岡山県民衆金庫（1923年、1925年）、昭和館（隣保事業、1927年）などの施設整備と事業を行った。また、済世顧問、済世委員等の連合体として人的な連絡調整機能をもつことによって、済世顧問制度の欠点を補完し、同制度と方面委員制度の媒介環としての機能を果たして行った。論者は、このようにして、同協会が都市・農村において救済制度の組織化に果たした役割とその意義を強調している。

終章では、5章にわたる近代都市・農村社会事業研究のまとめと、今後に残された課題にふれ研究の展望を行っている。

論文審査結果の要旨

本論文は、これまでの明治・大正期の社会事業研究を地域を中心に新史料に基づいて具体的に掘り下げたものである。この点では、戦前岡山県の社会事業史研究の代表的著作として知られてきた守屋茂著『近代岡山県社会事業史』（1960年）の水準を一步前進させた業績と評価できる。

まず、前3章の石井十次の救済思想と孤児院事業の展開については、

第1に、これまでの石井十次研究が主として人物史、伝記中心の研究に止まっていたのを、戦前日本資本主義を明治前期、明治後期、大正期に時期区分して彼の救済思想の変遷と特徴を跡づけ、儒教・キリスト教・基徳教などから信天教にゆきつくまでの過程を解明したこと（第1章）である。

第2に、この変遷を彼が生まれ事業も展開される宮崎県と共に特に孤児院事業が主に展開される岡山県地域を中心に、地域の新史料などに基づいて事業経営の特徴とそこに宿る問題点などを救済思想との関連で具体的に検討したことである。

第3に、論者の石井十次研究の中で、特に十次死後の岡山孤児院の廃止の理由を孤児院出身者及び最も有力な支援者大原孫三郎らの見解—孤児の社会的自立との関連—から内在的に解明した（第3章）点でユニークさが認められることであろう。

第4に、藤井静一の農村社会事業について、明治30年代、40年代、大正期のそれぞれについて歴史段階的に、また、村史料に基づいて分析した研究業績はこれまでにはなく、この分野でも研究史への貢献が顕著と思われる。

第5に、済世顧問制度の欠陥を補完し、救済事業の組織化への媒介をなす社会事業協会の役割については、従来からも指摘されてきてはいるが、これを岡山県のケースについてその特徴点を岡山県内務部所蔵史料などにより具体的に検討したことである。

本論文には以上のような評価を与え得るが、同時にいくつかの問題点を内包したものであることも指摘しておかねばならない。

第1は、本論文の分析が都市・農村にわたっており、全体として統一テーマが希薄なこ

と、また5章にわたる本文の分析と結論との関連性が十分とはいえず、また、終章の結論にもやや性急さと無理が認められることである。

第2に、副題には岡山県地域が中心となっているが、石井十次は、単に岡山県地域のみならず、宮崎県を含め全国的な社会救済事業史の中でも位置づけられるべきではないかということである。

そうして、その他の論文執筆上の技術的な問題点として、敬語の使い方の統一、引用文献のあり方などいくつかの改善すべき点のあることを指摘しておかねばならない。

以上の問題点を持つとはいえ、本論文が、各種の史料を丹念に集め分析し、論者の前著（『近代日本における社会事業の展開過程』御茶の水書房、1990年）を引きつぎ、近代社会事業の研究を深め前進させた業績として高く評価され得ることを記し、本審査委員会は、本論文を博士学位論文と認定する。

なお、本論文の審査会を、1996年2月1日に行い、合と判定した。